

「日中植林・植樹国際連帯事業」
中国大学生訪日団第3陣（スポーツ）
参加者の感想（抜粋）

1・2号車（バレーボール）

○今回の訪日は大変感銘深いものだった。私は初めての来日で、来るまで日本は一体どんな国なのか興味津々だったが、来日1週間程で、日本の文化やその教養を浅くではあるが感じ取ることができ、異なる風土や人情に触れることができた。日本人は誰もが日本を自分の家のように大切にしている、この点は、ごみの分別や東松島市スマート防災エコタウンの取り組みからも分かる。中国でも、これらを重視し始めていると思うが、日本の入念さには遥かに及ばない。これは学び、参考にする価値があると思う。食事の面では、日本と中国の違いはかなりはっきりしていて、伝統的な日本食はすべて定食で、1人分の数量が決まっている。更に、味付けもやや淡泊だ。私は東北出身なので、このような味付けは、やはり食べ慣れなかった。しかし日本の食べ物は精緻さにもこだわり、心も体も楽しくなり、まるで芸術品のようだった。

今年は中日国交正常化45周年に当たるが、私は中国と日本は隣国なので、互いに助け合うべきだと思う。帰国後、より多くの周りの人たちに日本の風土や人情、そして各都市の特徴を紹介し、私が接したり、見たり、聞いたりしたものを、より多くの友人や家族と分かち合い、奥深く含蓄のある違った日本の話を聞いてもらうよう努力したい。

○11月20日のセミナー「ゴミ拾いを通じたまちづくり、環境保全活動」について、講師の横尾俊成先生には心から敬服した。先生はアメリカの同時多発テロに影響を受け、自ら街へ出て行き、自主的に社会のための貢献をし始めた。私はその時、私ならどんな小さなことを始められるだろうと考えた。セミナーで学んだ次に挙げる内容は、私の今後の仕事や生活に対する見方を大きく変えた。一つ目は小さなことから始め、一步を踏み出し、社会に貢献すること。二つ目は根気と意志の強さ、挫けない精神で、どんな困難にぶつかっても歯を食いしばってやり続け、今の地位まで上ったこと。三つ目は、いろいろなイベントを通じて、しかも全てボランティアで社会の人々を感化し、次第に自分のチームを拡大して、多くの若者たちをボランティア活動に巻き込んだことだ。これには私も深く影響を受けた。帰国したら、自主的に小さなことから少しずつ始め、キャンパス内に落ちているごみを自主的に拾い、同級生たちを集め、横尾俊成先生の精神を伝え、北京でも「グリーンバード」を立ち上げたい。

次に、東松島市スマート防災エコタウン見学の感想だが、災害後の復興には、学校の開設、農作物を利用した商品製造等があるが、最も重要なのは再生可能エネルギー～太陽光というエネルギー資源の発展で、これは近隣の住民や病院、公共施設に電気を供給できるシステムだ。また、緊急時には近隣の病院、住民、公共施設に約3日間の電気を供給できる。これは大変勉強になり、太陽光発電に関する知識や、教室では学べない知識を学ぶことができた。帰国したら同級生たちに関連の知識を学ぶよう勧めたい。

最後に、日本の環境保護、ごみ分別などの知識を持ち帰り、家族と分かち合い、自ら環境保護に努めたい。

○中日両国の国交正常化45周年で、青少年間の交流はますます重要になっている。45年前、ピンポン外交が世界を動かしたが、その45年後にバレーボールが同様に中日両国の友好往来を深めた。今回の訪問期間中、神奈川大学、仙台大学と交流試合をした。試合はリラックスした楽しい雰囲気の中で進められ、試合後の昼食では日本の若者たちとの関係が更に深まり、連絡先を交換し一緒に写真を撮

った。また一番印象深かったのは、横浜市資源循環局鶴見工場で、ごみ分別回収と資源リサイクルの考えから大きな収穫を得た。全行程の内容は大変濃く、包括的かつ行き届いていた。最後に、今回の訪日は、あらゆる角度から見て全て印象深いものだった。帰国したら、見聞きしたことを中国の友人と分かち合いたい。

○今回この日中植林・植樹国際連帯事業の友好交流活動に参加することができ、大変光栄だ。数日間の滞在で最も印象に残ったのは、日本は非常に清潔で、環境保護分野と防災分野の技術が先進的であることだ。環境保護分野では、日本人は皆、環境意識がかなり高く、街の通りは大小にかかわらず大変清潔で、ごみ箱がなかなか見つからず、清掃作業員も見かけなかった。日本ではごみをポイ捨てする人はおらず、自分で持ち帰っている。中国では、この点があまりよくできておらず、意識がまだ低い。次に防災分野では今回、東松島市スマート防災エコタウンと、せんだい3.11メモリアル交流館を見学し、日本の防災分野における努力が理解できた。日本は地震帯に位置する国で、近年は中国でも地震や災害が多発しているが、見学を通じて多くの関連知識を得ることができ、防災対策についても少し理解できた。日本の防災分野と省エネ分野の先進的な技術も、私たちがもっと学ぶべき分野だ。

日本の大学生との交流の中で、日本の大学生が大変情熱的で、明るくて、とても友好的だと分かり、日本の大学生に対する理解が深まった。

帰国後は、日本の環境保護、環境防災面の先進的理念と技術を周りの人に積極的に伝え、より多くの中国の人々に環境保護にかかわらせたい。

○初めて訪日した第一印象は、景色が美しく、空気が澄んでいて、非常に清潔な環境だということだ。神奈川大学と仙台大学との交流試合で深く感じたことは、日本の大学生が大変情熱的かつ友好的だということだ。試合の時、一緒にウォーミングアップをし、一緒に練習をし、一緒にそれぞれの言葉で楽しく交流し、昼食を食べ、記念品を交換して、思い出を残すため一緒にたくさんの写真も撮った。また、多くの名所も訪れた。石ノ森萬画館では石ノ森章太郎氏の漫画に対する情熱と一途さを感じた。大崎八幡宮では、説明を聞いて、その歴史的背景や建物の構造も理解できた。最も印象深かったのは東京タワーの見学で、展望台から見た東京の美しさだ。また、良かった見学場所の資料は手元に残し、写真も撮ったので持ち帰り、友人や家族に日本で過ごした数日間の思い出や感想を話して聞かせ、機会があれば交流や見学のため日本を訪れるよう勧めたい。

3・4号車（野球・ソフトボール）

○日本は地震が頻発する地域に位置し、地理的環境の問題から、国民の防災意識が大変高く、実際に発生した状況に対し、各自が大変明確に自助方法と避難ルートを理解している。中国では地理的環境が日本とは異なるため、地震発生時の自助に関する研修が少ない。帰国後は周りの友人や家族に、地震発生時の自助方法や防災対策について話し、防災意識を高めてもらうつもりだ。

日本の大学との交流試合では、多くの異なる練習方法を学んだ。戦術的コンビネーションや打法の種類は違うが、参考になることが多かった。試合だけでなく、交流中は互いに多くの練習方法について話し合い、その中で深く同感することがあった。勉強でのストレスを抱えている中、どのように練習と勉強のバランスを取るか互いに経験を分かち合った。日本の学生の情熱も感じることもできた。

日本の街中では、ほとんどゴミが見られず、街は清潔だった。ごみ処理ではごみを宝に変え、再生可能エネルギーを利用し、先進的な技術で役に立つ資源を取り出し、汚染を大幅に削減したゼロエミッションの利用効率を高めている。ごみ処理も国民の自覚を表し、正確で自主的かつ自律的なごみ分類は、日本がごみ分別を大変重視していることを示すもので、国、社会、個人と、皆がかかわって

る。ごみは間違えて捨てられた資源かもしれない。中国は人口大国で、ごみ生産大国でもある。私たちがごみを分別し、資源をリサイクルすれば、中国の資源欠乏を軽減する一つの方法ともなる。自分を律することから社会の気風を重視するまで自分のごみ分別意識を高めていけば、社会の意識を高めることができるはずだ。

○まず、日本は環境保護、防災、緑化分野が大変上手くいっている。日本に来て飛行機を降り、道端でバスを待っている時、あることに心を動かされた。それは、道端に停車し乗客を待っている車が、すべてエンジンを停めていたことだ。これは環境保護のためであり、この行為こそ、日本国民の素質の高さを示すものだ。一方で、日本の法律は整っていて、環境法が重視されている。停車中アイドリングストップしないと罰金が科せられると聞き、これは思いもよらないことだった。素質の高さは法律で矯正されたもので、その後、それが国民の習慣となったのだ。これには改めて考えさせられた。なぜなら、私たちは大学で法律の専門知識を学んでいて、中国の環境法を整備する上でのヒントになったからだ。

○日本は環境保護、防災、緑化の分野で既に大変行き届き、個人的には何も改善すべき点が見つからない。なぜなら、既にほぼ完璧だからだ。この1週間の訪日で、日本がなぜこの分野で中国より優れているかが分かった。日本は国民の教育と普及を大変重視しており、これは中国が参考にすべき点だと思う。中国人も素質の高い人は多く、大多数を占めているが、10人のうち1人でも素質の低いことをすれば、残り9人のイメージが悪くなる。だから、すべての人に環境保護意識を持たせるよう、中国は改善すべきだ。緑化の面では、中国は既に上手くいっているが、それを続けることが必要だ。環境保護や国民の素質であれ、防災意識であれ、日本は確実に中国より遥かに優れている。中国が国の恥を忘れず、謙虚な気持ちで日本に学び、日本の先進的技術と国民教育に学べば、中国は日本より更に強大になるだろう。中国が日本を超えるその日を待ち望むと共に、日中関係がより友好的になるよう期待する。

○今回の植樹活動への参加、また環境・防災分野及びその他の視察・交流活動を通じて、細部から日本の環境保護教育の理念を感じることができた。

2日目に NPO 法人グリーンバード代表、東京都港区議会議員の横尾俊成講師の「ゴミ拾いを通じたまちづくり、環境保全活動」の講義を聞いた。立ち上げ時は数名だった参加者が、今は年間のべ 33 万人になり、16 年で 85 団体になったという。しかし、言うは易し、行うは難しだ。環境保護のため、皆のために貢献するため、定期的に街の清掃活動をし、それから「ポイ捨てはカッコ悪い」という宣伝活動をしてきた。一番印象深かったのは、日本の紙媒体の発展が特に優れており、デザインもインパクトがあったことだ。

地震対策、防火分野についても、ある程度理解ができた。多くのことを自分で実践し、学び、机上の空論にしてはならず、未然に防ぐことが大事だ。地震の振動を体験し、身の守り方や消火器での消火方法、火災発生時の避難方法から、本当に多くのことを学んだ。帰国後は日本の良い文化、良いものを皆に伝え、時には細部がその成否を決めることもあるので、必ず細部も重視すべきだということを伝えたい。

○植樹などの一連の活動、その影響は単に植樹だけに留まらない。全行程で日本人の物事への対処が大変慎重で細やかであり、環境問題について“人を奮起させる”真剣さと綿密さを深く感じた。自発的に都市の衛生のため、環境保護のために貢献する組織、見通しの良い工場、木々に付けられた支柱、

そして自分の制服に対する職員の誇り、どこに行っても安らぎを感じ、同時に日本の環境分野に対し敬服した。

植樹活動など以外で一番印象に残っているのは、拓殖大学と山梨学院大学との野球の交流試合だ。それは私の野球に対する認識を根底から覆し、漫画の中で描かれている野球は本当だったと気づき、まるで夢の世界のようだった。私は中国と日本とはある部分において、かなり大きな差があると感じた。帰国後は、滞在期間中に見聞きしたことや見識から詳しく学び、実践し、一步ずつ積み上げ、祖国の美しい未来のために少しでも貢献したい。

○今回の訪日で多くの物に対する見方が変わった。中でも、最も重要だと思ったのは、人と自然との関係だ。日本は発展国で、経済発展と環境保護とは相反するものだが、日本は自然との調和をうまく図っている。まず日本は自然に順応し、津波や地震で大きな被害を受けたものの、決して挫けず、解決方法を模索してきた。小さい頃から子供たちに生き延びる術を学ばせている。次に、自然保護について、日本は副流煙による大気汚染を厳しく抑制しており、誰もがごみのポイ捨てはせず、各家庭でごみの分別に努め、汚水は処理した後、川に流している。中国もこの点を学ぶべきで、その環境保護意識の普及(特に年少からの普及)が重要だ。

日本人は物事を丁寧に行うことも参考にすべきだ。一つのことを真剣に着実に根気強く成し遂げている。それはリニアモーターカーの建設と同様、時間と労力はかかるが、一度苦労すれば末永く利便性を享受できる。家屋の建設は、決して手抜き工事をしてはならない。そうすれば、自然災害が発生した際、家が丈夫なシェルターになるからだ。中国が学ぶべきことは本当に多い。焦らず、いい加減にせず、目先の利益にとらわれなければ、着実に建設ができる。

自分について言えば、今後は礼儀正しく、衛生を重んじ、他人に配慮して、他人に迷惑をかけない人になりたい。

○植樹活動とその他環境・防災分野の交流活動を通じて、日本人の環境に対する愛着の心を深く感じた。まず、日本の緑化面積は本当に広く、それを基盤として更に植樹を奨励しており、本当に先見の明がある。また、富士北麓浄化センターとサントリー天然水 南アルプス白州工場の見学で、日本企業の自然環境への配慮の程度が分かり、これは中国ではまだ実現が難しい。地震と火災現場の体験では、日本人がなぜ屈託なく生きているかがやっと分かった。災害で幸運にも生き延びた時、人は大きく成長する。また、もともと日本人は避難への意識が大変高く、災難の中でも落ち着いて対処できる。このような生活面での意識は私たちが学ぶに値する。

次に、ソフトボール交流について、二つの大学で日本の大学生と一緒に練習し、試合をした。言葉の障害はあったが、同じことに情熱を傾けているので、皆積極的に交流した。彼女たちが自分の好きなスポーツにひたむきで、他の雑事は放棄し、家族も全力で応援してくれ、チーム全体が同じ方向に向かって努力していた。また彼女たちは、既に高いレベルにあっても満足していなかった。これは私たちにとって大きな衝撃であり、このような精神はスポーツであれ、将来の仕事や生活であれ、最も素晴らしい信条となるだろう。